

月刊

いっしょのものとも

第七卷

三月号

通心喪失

いま

真のコミュニケーションが
社会から
無くなりつつある

それは

現代が

管理する社会

支配する社会

搾取する社会

おごった社会

になっているから

うつうつ

としとつて

やがて死に行く

この身とて

一日ごとに

人と成るべし

人生を考え直して

みたい人は(一二七)

『聖書』解説(三)

マタイ福音書の第五章を続けます。

四 悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。

この文とは逆に、世間の普通の考え方では、悲しみがあつた人は不幸で、なんら悲しみのない人が幸福である、というようになると思うのです。なぜなら、誰でもが、求めて悲しみたいとは思わないからです。なのに、ここでは、たとえ慰められるとしても、悲しむ者が幸いというのですから、常識に反しているように思われます。

ですから、マタイ福音書の解説書を読んでみましても、適切に理解できているものではありません。少なくとも、私はいまだに出会っていません。

では、この第四節が、単に常識に反することを言つて、人の注意を引こうとするものなのでしょうか。

そうではありません。深い真理を述べているのです。

理解できない原因は、先にも述べましたように、人はたとえ慰められるとしても、悲しみたくなかないという思いがぬぐいきれないからです。慰められなくてもよいから悲しみたくなかないと思うからです。ここに理解できない根本的な原因があると思うのです。

ですから、理解する鍵は、この「慰められる」という言葉にあります。実は、この「慰められる」という言葉は、普通に、相対な私たち人間の誰かから慰められるのではないのです。永遠にたましいが救われて、絶対な慰めを得ることを言っているのです。もう、それ以後は、慰めがいくほど悲しむことがないようになるような、永遠の慰めをうることができると言っているのです。

世間の相対な人は、他人が落ち込んで、悲しんでいるのを見れば、たいていは慰めるかもしれないが、逆に、他人の方が財産や名誉を得たりしますと、必ずねたんで、その人を中傷し、悪口を言ったりします。ですから、悲しんだとき慰めを得ているようですが、真の慰めにはなっていないのです。

このことを、多くの人は知っています。ですから、慰められなくてもいいから、悲しみたくなかないのです。

でも、私が言いますように、もし悲しんで、慰められた結果、真の、永遠なるたましいの安らぎが得られるな

らば、多くの人は望んで悲しんでみたいと思われと思うのです。そのことをキリストはここで言っているのです。

前回に解説しました「三 心の貧しい人は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」の、後半部分「天の御国はその人のもの」というのと、ここでいう「慰められる」というのは、ほとんど同じことを言っているのです。

では、この節の前半部分の「悲しむ者は幸いです」の「悲しむ」とはどんなことなのでしょう。勿論、普通の意味で悲しむことが含まれることは当然なのですが、もっと深い意味が含まれていると考えて頂けたらと思うのです。

それは、普通の人が悲しいと思わないようなことでも、悲しいと思って頂けたらということ。どんなことかと言いますと、自分の人格が完成していない悲しみ、自分のたましいが救われていない悲しみであり、自分以外のあらゆる人が真の幸せになっていない悲しみです。

現在の日本人は、経済的に豊かになって大多数が中流意識をもち、生活に満足しています。そして、「自己」を肥大させ、オウム真理教のように、自己を絶対化させましたがって（解脱していないのに自分が解脱して、絶対

の境地に達したと思いたがって）いるのです。

実は、これほど悲しいことはないのです。でも、本人は悲しむどころか、わがまま放題をしています。人の生命さえ平気で奪うことができるのです。なんと悲しいことでしょう。

こうしたことまで悲しむことができれば、そこから救われたいという思いがしきりにします。

しかし、いつも言っていることですが、悲しいかな人間は理性（あたま）で救われようと思っても救われるものではありません。理屈でわかってても、理屈通りに救われることはないのです。

哲学者は人間の生き方についての理屈を考える人たちですが、私から見ますと、大多数の哲学者は無駄なことをしてきたように思えます。それは、理屈をこねてみても、多くは人生の真実に気付けないからです。理屈はこねますが、偏っていますし、自分を理屈通りに制することができないのです。現実の生活では間違いを犯してしまうのです。

ですから、救われようと思つたら、理屈を考えてもだめなのです。そこが「あたま」の発達した人間の悲しいところです。どうしても、はじめにあたまで考えてしまうのです。

そうするのではなくて、禅宗でも「理屈を言わないで、黙って座れ」という通り、まず、はじめに修行することが大切なのです。それも、「ただひたすら」しなければなりません。

そうして、修行していますと、「慰め」を得て、人生の真実に気付き、老子のいう「為さずして為さざることなし」という境地に達するのです。そうなりますと、先程の哲学の例で言いますと、為さなかった哲学も、「高殿から下を見渡すように」手に取るように、その偏りや限界が見えてくるのです。

本節に述べていますように、悲しみの体験がこうした修行をする動機付けに必要なというわけなのです。そうした体験のない人が、修行に耐えることはあり得ないということなのです。

五 柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。

柔和とは、一般にはやさしくおとなしいことをいいますが、では、そうした人が地を相続するとは、どんなことなのでしょう。普通では、これもなかなか理解できません。この文章の受け取り方も、その人の人生体験に

応じて変わってきます。

いま、地球は滅亡に向かってまっしぐらに進んでいるように思われます。いくつか、その原因と考えられるものがあります。それらは、例えば、文明がもたらす人口爆発（地球の自然を保ち、資源を枯らさないで生きていける人口には限りがある）、物質（＝人間以外のもの・自然）は自由に享受してもいいという考え（原子核や遺伝子の操作、自然にない新物質の開発と使用、化石燃料や木材などの資源の浪費、例えば高度消費経済原則だけで、不必要に大きな車に、高速で一人乗っていたり、まだ使える物でも粗末にし、直ぐに廃棄する）、

誤った農林漁業の仕方による地球環境の荒廃（機械化農業と肥料・飼料・農薬の大量消費）などです。こうしたことから、私たち現代人は地球を後世に残すことができないうという危機感を生み出していると言えます。「地を相続すること」を不可能にしているように思うのです。ではなぜ、こうなって来たのでしょうか。ここから引き返すにはどうしたらいいのでしょうか。そのことを考えるヒントを与えているのが、この節だと思つのです。

では、そのヒントはどこにあるのでしょうか。それは、「柔和な者」の意味に含まれているように思います。前にみましたように、柔和な者とは、やさしくおとなし

い人を言いますが、そのことをもう少し深く考えてみたいと思います。

柔和と言いますのは、私の心理学モデル（人間精神についての考え方）で言いますと、「こころ」つまり「情動・感情」の在り方に関わることを言っているのです。

この「こころ」の在り方で実現する価値として言いますと、それは「自分を制して人を立てる」ことで、孔子の言う「仁」にあたっています。私の言葉で言いますと、「自分の情動をコントロール」して、「ひとの心を感じるこころ（感情）」を大切にすることです。

では、情動をコントロールするとはどんなことでしょうか。情動には、欲望と情緒と気分があります。

欲望には、大きく言って食欲、性欲、優越欲があります。食欲には、単に食べるだけではなく、金銭欲や物欲（経済的な財物への欲）も含まれます。性欲には、自分の子孫の繁栄や家系の存続を願うことも含まれます。優越欲は聞きなれない言葉だと思いますが、人に優りたい、勝ちたい、認められたいという欲求で、負けず嫌い、攻撃的、名誉欲、権力欲、支配欲などとして現れます。

情緒には、快苦喜怒哀楽があります。人は苦を避け、快を追求する傾向があります。また、多くは人間関係のなかで、喜び、怒り、哀しみ、楽しみを体験します。

気分は、情緒よりはもつと長続きのする基本的なこの状態を言います。暗い気分とか明るい気分とか、何となく不安であるとか、長い期間に渡って、何もする気がしないとか、逆に生きる気力が充実し満たされた気分になっているとか、と言ったことを表します。

情動をコントロールするとは、このようにさまざまに「欲望」への執らわれを制御し、否定的な「情緒」や「気分」を起こさないようにし、肯定的なものを常にもてるようにすることなのです。

そういうことができずと、「ひとの心を感じるこころ」をもつことはできないのです。自分の情動に左右されて、ひとの心への配慮ができなくなり、人を傷つけたり、人を怒らせたり、もつと言えば人を自分の目的の手段として利用するようになるのです。ちなみに、お互いに権利を主張し合い、お互いが利用し合う関係は、ギブ・アンド・テイクの関係と言われ、それは「取引」とか「役割」という用語で表されます。

この世がこのような人で溢れますと、この世を相続することができなくなっていくます。柔和な人とは、自己を抑えて人を立てることのできる人なのです。この世がそうした人で溢れるようになると、滅亡を免れ、次々と世代を変えながら受け継がれていくのです。

自作詩短歌等選

神さまでさえ

法句經（九四）
馬をよく
御者ならずごと
自らの
感覚しずめ
高ぶりを
捨てて汚れの
無きし人
かかる境地に
ある人を
神さまでさえ
うらやみにけり

人権と思想

人間が
人間として
認められない社会では
人権が
主張されなければ
ならない
しかし
人権を主張しても
そういう社会を
なくする思想と
それを実現する
運動がなければ
真の人間開放は
できない

人権とこころ

人権が叫ばれるとき
それは
きまつて
個人の権利を
守るものに
終始する
人権が
真に
意味あるものと
なるためには
人の心を感じるこころと
組み合わされなければ
ならないのだが

差別と人権

差別は
エゴ
人権は
たてまえ
エゴを
捨てなければ
差別は
無くならない
人権が
エゴを保護する
楯となり

世間でも自己

昔は
世間では
他己を働かせるが
家では
自己のままを出す
という亭主が
多かった
でも今は
世間でも
自己のままを出し
家でも
自己のままを出す
というカミさんが
多くなってきた

天地天命に誓って

記者会見で
天地天命に誓って
というときは
きまつて
うそを言うとき

記者会見
天地天命
うそをつき

気が抜けている

細かいことには
気がつくのに
大きいことに
気が抜けている人

自作随筆選

助けられず当たり前

いま、日本人が生きる目標を失っているように思われます。

明治維新以後太平洋戦争までは、いわゆる「富国強兵」が日本人の目標になってきたと思われまます。ところが、太平洋戦争以後は、平和憲法のお陰で、強兵が消え、富国だけが人々の目標になりました。

そして戦後五十年、その目標は到達され、今や、一人当たりのGDPは世界一となっています。

しかし、この目標は達成されましたが、人々が果して幸せになったでしょうか。必ずしもそうではありません。社会病理はますます進み、オウム真理教のようなかつてないファッショ集団も発生しました。アルコール依存や境界例とよばれるような人格障害が増し、これまでのいわゆる精神病も蔓延しています。いじめ、不登校、自殺、殺人など、子どもたちまでも、多くが精神を病んでいるのです。

いま人々は、富国の延長線上にあると思われまますが、

自分の食欲（物欲）、性欲、優越欲の満足に奔走して
います。そのみが精神の飢餓を癒してくれるもの、自己
を定位させてくれる対象なのです。

いま日本人は、フランスや中国の王さまのように、世
界中から美味しいものを集めていますし、美味しい料理
を求めて世界中に出掛けています。

それは、食べ物だけではありません。フィリピンの売
春婦の九五%の客が日本人で、彼女らはみな日本語が堪
能だといえます。この現象はなにもフィリピンに限った
ことではないように思えます。

また、優越欲を満たすスポーツへの熱狂は、異常と思
えるほどです。オリンピックで金メダルが予想される人
が、銀に終わったりしますと、非難されますし、本人も
それを感じて涙を流してお詫びしなければなりません。
高校野球もその例外ではありません。かつて沖縄水産高
校が、二年連続で準優勝したことがあります。それは
誇るべきことだと、私は思うのですが、解説者は恥ずべ
きことのように言っていました。また、何年か前に超高
校級と言える打者が全ての打席を敬遠され、観客が騒ぎ
ましたが、それに対する高野連の会長の談話が、観客の
態度をたしなめるのではなくて、野球の規則に違反して
いない敬遠を非難していました。それが、どれほど虚し

く危険な「ヒーロー」の誕生を求めるものであるかを、
本人は気付いていたのかどうか。

そんなことを考えていたところ、一月七日付朝日新聞
の論壇欄に、野球殿堂入りした衣笠祥雄氏が「育てよう、
ヒーロー」と題して投稿していました。この題に驚いて
読みましたが、氏の投稿の意図がどれほど優越欲を満足
させるためのものであるか、予想どおりでした。オウム
のファッシュヨに通じるものがあるように思われます。

このように、いま日本人は生きる目標を「自己」の欲
望の満足だけに求めています。それはとても不幸なこと
です。そして危険なことです。世界の荒廃、地球の荒廃
にどれほど貢献していることかはかりしれません。

たとえ自己を追求するとしても、もっと高度な自己を
追求したいと思えます。それは「自分自身を知ること
を目指して、より善く生きていくこと」です。自己の生死
を諦めることです。生死を超えることです。自己の生命
への執着を捨てることです。それに至れるように精力を
注ぐことです。精進することです。

その時、他者のこころを感じることができるようにな
って行くのです。自己が助けられることばかりを考える
のではなくて、助けられなくても、助けるのが当たり前
だと考えることができるようになるのです。

釈尊のごとば（四四）

法句経解説

（一六一）自分がつくり、自分から生じ、自分から起った悪が、知慧悪しき人を打ちくたく。 金剛
石が寶石を打ちくたくように。

「自分がつくり、自分から生じ、自分から起った悪」とはどんな悪なのでしょう。そもそも悪とは何なのでしょうか。

七仏通戒偈に言いますように、仏教のエッセンスをできるだけ短く言いますと、悪をなさず、善をなし、こころを浄める、ということ、悪をなさないことがとても大切なこととされています。これは勿論、仏教だけについて言えることではありません。老子でも、ソクラテスでも、キリストでも、聖人といわれる人は誰でも、悪をなさず善をなすことを説いています。

なのに、人はなかなか善をなすことができず、悪をなしてしまいます。しかも、普通の人はそうなのですが、「知慧悪しき人」はそれが悪をなしているのかどうか分からずに、あるいは善をなしていると思って悪をなしているのです。あたかもオウム真理教のようになります。

でも、これは何もオウムに限ったことではありません。オウムは際立って目立ったことをしただけです。例えば、昨年だったと思いますが、アメリカの大統領が「日本に原爆を落としたことは正当であった」と明言したことがありましたが、本人は、アメリカにとって善いことを言ったと思っているのかも知れませんが、私から見ますと、悪をなしているように思えます。

私は、原子力はどんなものでも、この地球上から抹殺すべきだと思っています。でも、世間はそこまで思わなくとも、核兵器はなくしていこうという世界的傾向にやっとなつてきた矢先のこと、米大統領の発言は、原爆使用を「相対的なもの」にするもので、今後も場合によっては使用することを正当化するものだと思われまます。これでは、今はやりのテロがやがて普通の爆弾だけではなく、原爆を使用する時が来るのではないかと懸念されます。アメリカがその犠牲にならないと、誰が保証できるでしょうか。この偈に言いますように、「金剛石が寶石を打ちくたくように」、アメリカ人自身が、「自分がつくり、自分から生じ、自分から起った悪」で「打ちくたくだかれ」るときがくるかもしれないのです。オウム真理教のようになります。

では、「善をなしていると思って悪をなす」ことを無

くしていく、あるいは少なくとも「悪をなさない」ようにしていくためにはどうすればよいのでしょうか。

それには仏教で言えば、心を浄めることがあるのです。キリスト教で言えば、お祈りがいるのです。そのためには、どこまでも聖人の教えに則って行動しなければなりません。

(一六二) 極めて性(たち)の悪い人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのことを、自分に対してなす。
蔓草が沙羅の木にまといつくように。

たいして難しい言葉はないと思いますし、内容もそんなに難しくないとします。つる草が木にまといついて枯らしてしまうように、性(たち)の悪い人は、かたきが望むような不幸なことを自分に対してなし、自分をだめにしてしまう、ということなのです。

こうした例は、見渡せば皆さんの回りにも見いだせるのではないのでしょうか。ご自身は自分にとって不幸なことをなしておられませんでしょうか。

それはさておき、「極めて性の悪い人」とはどんな人でしょうか。私は、この言葉を聞くと、最近、精神科で取り上げられることが多くなってきた「境界例」

あるいは「境界性人格障害」という言葉を思い出します。

精神病には二大精神病と呼ばれる精神分裂病と躁鬱病があります。私は、それらを自己と他己のバランスの崩れとして説明しています。前者は自己が肥大し、他己が縮退するもので、後者は逆に他己が肥大し、自己が縮退するものです。

そして、この境界性人格障害は、自己と他己の統合不全と考えられます。なおついでですが、この他にもな精神障害としては神経症がありますが、それは、無意識(髄識)における精髓と神髄の統合不全と考えられます。今後、検討していきたいと考えています。

こうした精神的な障害を持つまで行かなくても、それに近い人は大勢います。私も、子どもの頃はそうだったのではなかったかと思えます。

自分に自分で不幸なことをなしていても、なかなか人間は気付けないものです。あるいは、気付いてやめようと思っても、業なものではなかなかやめられません。

皆さんも反省されれば、自分に対して不幸なことをされているのではないかと思えます。現代人には、それを他人のせいにする傾向があります。どうかそれをじつと見つめて、それから抜けられるように修行・精進しようではありませんか。

(一六三) 善からぬこと、己れのためにならぬことは、なし易い。ためになること、善いことは、実に極めてなし難い。

この偈を読んで、いま日本人が善いことをし、善からぬことをしないでおこうと真剣に考えているのかどうか、疑問がわいてきます。

いま日本人は、経済的に安定して安易に流れ、自分の好きなことをし、自分の得になることをしたい、しかし、自分の嫌なことはしたくない、自分の損になることはしたくない、というように考えているのではないかと思うのです。名利に執らわれて、善いことか、善くないことかでは判断しないようになっていってしまうのです。

例えば、ヨーガをすれば、健康と若さとバイタリティーが得られ、ところが安定して温和だが強い性格になり、すばらしい判断力と直観を得ることができ、たましいが救われて、永遠のいのちを得ることができると、私が言っても、精進してそれを毎日実行する人は滅多にいません。

なぜなら、たとえ自分にも他人にもこれほどよいことではないと言われても、それを毎日続けるためには「安易

さ」を犠牲にする強い意志と自己を制する力が必要なのに、それに見合う大した名利や実益が得られないと判断するからです。あるいは、ヨーガをしなければ利得を失う(例えば会社をくびになる)ような社会的な役割が期待されているわけでもないからです。そうなりますと、ただ、ヨーガをすることはしんどいめをするだけだということになります。多くの人は、こうして安易さに流されていくのです。

このように、「ヨーガを毎日すること以外に人間のたましいが救われ、真の安心立命に至る道はない」という私の言葉をひたすら信じてヨーガに精進することはとても難しいことです。「善からぬこと、己れのためにならぬことは、なし易い」のに、「ためになること、善いこととは、実に極めてなし難い」のです。

特に、現代人は自己が驕慢になっていて、この傾向に拍車がかかっていると思います。経済的に楽になって、自己を肥大させているのです。自分の幸せ(楽な生活)は自分の行動で獲得できると思っっているのです。意識して名利を追求することで、幸せがくると思っっているのです。人の価値が名利で測られる社会がますます進んでいきます。誰が多くのも得を得ているか、それがその人の価値と考えられているのです。情けないことです。

後記

- 一、先日、雪がちらつきました。今年は、何年ぶり、あるいは何十年ぶりの寒さのようです。でも、梅の蕾はもう開いています。時間は確実に刻まれていきます。
- 二、久しぶりに山城町の旧家に、風呂に焚くための間伐材をとりに行ってきました。雪が積もっていました。吉野川を挟んで向こう側に見える、雪化粧をした雄大な国見山（標高約千四百メートル）の景色を見ていましたら、やっぱりいいところだなあ、と思えてきました。
- 三、この自然がいつまでも、壊されないようにと、祈りたい気がしました。
- 四、いま、日本では林業も農業も廃れていっています。山も農地も荒れていっています。あの山城町でも林業や農業をしているのは、お年寄りが殆どです。後十年、二十年たったときどうなっているのかとあ、と考えてしまいます。
- 五、現在は、世界中から安い木材や農作物を輸入していますが、いずれ輸入できなくなってくるときがきます。それが、三十年先になるか、五十年先になるか分かりませんが、その時のことを考えて、今から政策をしておかなければならないと思います。
- 六、今月号の『聖書』解説は難しかったでしょうか。何

度も読み返してみたいと思います。十分論証せずに、直観的に書いてある部分は特に難しいと思いますが、それは信じて頂く以外にないところです。

七、宗教は実践ですので、そこには、直観的体験によってしか理解できないところがあります。しかし、覚悟にいたるような直観的体験がある人は滅多にいませんので、

理解できがたいわけです。宗教は信じる以外にないというのはそういう側面のことを言っているのです。そうして聖者の言葉を信じていれば、間違いを犯すことも少ないのです。哲学者が難しい言葉を弄するのは訳が違います。聖者は真実な体験に基づいていますので。

月刊	平成八年三月八日
こころのとも	〒772 8502
第七巻	徳島県鳴門市鳴門町高島
三月号	鳴門教育大学 障害児教育講座気付
(通巻 七十五号)	(ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしなり</small>

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと
口座番号 01610 8 38660